大牟田の近代化産業遺産

三池炭鉱 三川坑跡（みかわこうあと）

三川坑開さく

昭和8(1933)年当時の三池炭鉱は、宮浦、万田、四山の3坑体制で年産224万トン、三井鉱山出炭の半分を占めていました。しかし宮浦・万田両坑はすでに老朽化が進み、このままでは海底採炭を続けていくことは困難でした。

そこで、さらに有明海の下を採掘するため、開発されたのが三川坑です。

大牟田市西港町から有明海の海底下に向かって傾斜角11度、長さ約2,000mの斜坑2本を開さく、深度350mのレベルを基準坑底として四山坑とも連絡させました。

ありし日の第一斜坑

出炭の集約

こうして三川坑は、昭和12(1937)年9月から斜坑の掘削を開始、昭和14(1939)年10月に第一斜坑、昭和15(1940)年6月に第二斜坑が坑底に達し、同年10月より出炭を開始しました。

これに並行して他の3坑(宮浦、万田、四山)の増産工事も進めた結果、三池の出炭は昭和14(1939)年度には341万トン、三川坑が加わった昭和15(1940)年度には377万トンとなり、昭和19年(1944)度には403万トンに達し、終戦前の最高出炭量を記録しました。

新たに海底区域の主要部分の運搬を使命とする三川坑は、宮浦坑の集団ベルトコンベア方式が採用されました。(ベルトコンベアを多数直列に並べて集団的に構成)

当初は日産1万トン(年産300万トン)の設計でしたが、後にベルト幅や速度を上げて、容易に日産2万トン(年産600万トン)に倍増できました。

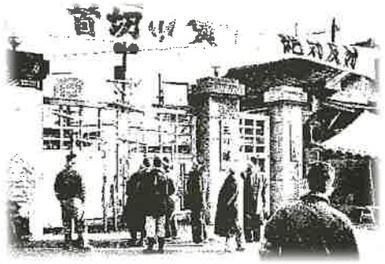
その後、昭和28(1953)年9月より四山坑で採炭した石炭を三川坑から運び出し始めました。昭和44(1969)年には宮浦坑で採炭した石炭も三川坑から運び出すことになり、三池炭鉱の石炭は三川坑から一手に運び出す仕組みとなりました。

工場が建ち並んでいた三川坑敷地内

選炭場・ホッパー

三川坑の坑底には貯炭槽が6槽あり、炭層別に貯炭できました。それぞれの貯炭槽に石炭を分別した後、地上にある選炭工場に送り、鉄鋼、ガス、コークス、電力、セメント、化学などの需要者の用途に沿って生産しました。

三池炭鉱で掘られた石炭は、すべて三川坑の斜坑ベルトコンベアから揚炭され、その石炭が選炭工場に入り、最初に通るのがホッパーでした。このホッパー争奪を巡り、三川坑が三池争議では最後の決戦場となったのです。



三池争議時の正門

戦後の三川坑

三川坑は、戦後も三井鉱山の最主力坑として活躍しました。昭和23(1948)年5月にいち早くドイツから導入した鉄柱の使用を開始、「カッペ採炭法」への道を開きました。翌年には昭和天皇のご入坑もありましたが、平成9(1997)年3月に三池炭鉱閉山とともに閉坑しました。昭和天皇関係の資料は隣の三井港倶楽部にも展示しています。

●三池争議…昭和34(1959)、35(1960)年にわたる戦後最大の労働争議。

三池炭鉱の合理化に端を発し、「総資本対総労働」の対決という形で、三川坑が労使の決戦の場となりました。

●炭じん爆発事故…昭和38(1963)年11月9日発生。死者458人、重傷者675人、CO中毒患者839人を出す戦後最大の労働災害となりました。

昭和天皇ご入坑の様子

①正　門

大きな門扉の右横が通用口です。門柱には現在も『三井石炭鉱業株式会社三池鉱業所』のプレートが残っています。正門右手の建物は守衛室です。

②管理棟(旧事務所)

現在は、受付及び展示室となっていますが、当時は人事、事務、労務関係を行う事務室でした。社宅の担当者などもいました。

③機械調査・電気調査・採鉱調査

機械・電気・採鉱等に関する設備に関する事務を担当する場所でした。現在は入れません。

④中庭(日本庭園)

昭和24(1949)年に昭和天皇が三川坑へ御巡幸された際に、記念に造られた庭園です。昭和天皇は白衣を着て、キャップランプをかぶり、坑内に入坑、終戦後のわが国の経済復興を担う三池炭鉱の生産状況を見学されました。

⑤繰込場

入坑前の鉱員が装備等の準備、作業の確認を行う場所です。入坑前に鉱員たちが待機しここで職員からそれぞれ切羽(掘進や採炭の現場)等の指示を受けます(写真上)。その後、第二斜坑(入昇坑口)へと向かいます。

繰込場

コンプレッサー室

操業中の第二斜坑

⑥職員浴場

風呂場も「職員浴場」と「鉱員浴場」に分かれていました。鉱員浴場は現存しません。

⑦入昇坑口

繰込場で点呼等を受けた後、入昇坑口から第二斜坑口に降りていきます。右側にある鏡で服装のチェックなどを行います。

⑧第二斜坑(坑口、巻揚機室)

坑形6.06m×4.35m、傾斜角度は約11度。入気、材料・人員昇降のほかに排水に使用されました。揚炭は第一斜坑から行っていました。(写真下)

⑨コンプレッサー室

削岩機など圧縮空気を動力とする機械の動力源となる、コンプレッサーが置かれていました(写真中)。

⑩第一斜坑(巻揚機室)

三池炭鉱の揚炭・選炭のメイン坑口でした。現在坑口は埋め戻されています。昭和38年に炭じん爆発事故が発生した坑口です。

⑪山ノ神神社

祭神は愛媛県にある大山祇大神。山の神に拝礼し安全祈願を行っていました。

炭鉱電車

三池炭鉱専用鉄道は、明治42年より電化が始まり、昭和12年1月に全線の電化が完了しました。一時は従業員輸送(昭和21年～昭和59年)や、地方鉄道(昭和39年～昭和48年)として旅客も運びました。

炭鉱閉山時(平成9年)に電気機関車のうち4両を大牟田市が譲り受け、企業の敷地内で保管していましたが、平成28年8月には全国からの寄付により三川坑跡へ移設、展示しています。

また、宮浦～旭町間は、現在も三井化学専用鉄道として、化学製品等の輸送に使用されています(45トン級機関車2両、20トン級機関車3両を使用)。

米GE製15t級 5号機関車

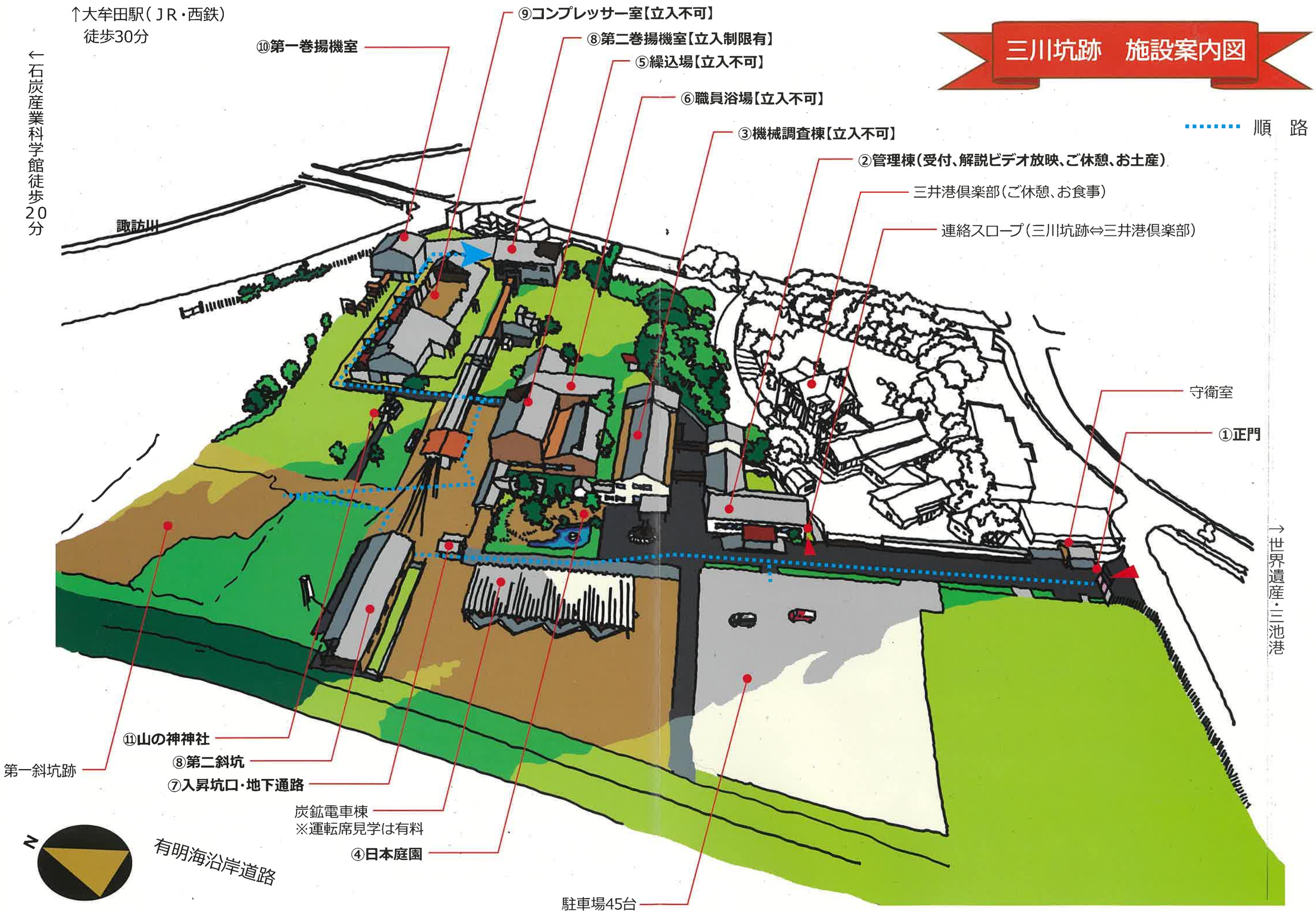
三菱造船製20t級 5号機関車

独ジーメンス製20t級 1号機関車

東京芝浦製作所製45t級 17号機関車

2019年3月印刷

三川坑跡　施設案内図


↑大牟田駅（ＪＲ・西鉄）
徒歩30分
←石炭産業科学館徒歩20分
諏訪川
⑩第一巻揚機室
⑨コンプレッサー室【立入不可】
⑧第二巻揚機室【立入制限有】
⑤繰込場【立入不可】
⑥職員浴場【立入不可】
③機械調査棟【立入不可】
②管理棟（受付、解説ビデオ放映、ご休憩、お土産）
三井港倶楽部（ご休憩、お食事）
連絡スロープ（三川坑跡⇔三井港倶楽部）
守衛室
①正門
順　路
→世界遺産・三池港
⑪山の神神社
⑧第二斜坑
第一斜坑跡
⑦入昇坑口・地下通路
炭鉱電車棟
※運転席見学は有料
④日本庭園
駐車場45台
有明海沿岸道路
N